

はじめに

深 浦 町 内 会

会長 今 村 恭 啓

先ず、町内会会員の皆様には、常日頃より町内会活動、行事に対して多大なご協力、ご理解を賜り、心より感謝とお礼を申し上げます。

私ども役員は、ボランティア活動の伝統を受け継ぎ、会員の皆様の思いを少しでも共有出来るよう、防災・防犯・環境整備の活動はもとより、交通安全・夏季祭礼・リクレーション・文化的活動に取り組んでいます。

さて、この度「深浦の歴史と文化財」を発行しようと思い立ったのは、来る令和7年(2025)に深浦の鎮守様「大国主社」創建400年と「深浦町内会」発足75周年を迎えます。そこで、会員の皆様の世代交代と新規会員の方々も多くなり、深浦の歴史と文化財について、改めて町内の方々に知っていただきたいとの思いで、発行の運びとなりました。

深浦・鉾切は横須賀市の最北部に位置し、一帯はかつて丘陵が続き、浦々は海が深く入り込んだリアス式海岸で小さな島々が在りました。そこには縄文時代の夏島貝塚をはじめ、幾つかの貝塚遺跡が点在していました。また、江戸期より存続している社寺等もあります。しかし、明治以降海軍航空隊等の軍施設の進出に伴い、一般住民は他所に移転し住環境は大きく変化しました。戦後、軍施設の転用により民間企業が進出し戦後復興の一翼を担い、追浜地区は大きく発展し今日に至っています。

よって、その「出来事」を集めた「深浦の歴史と文化財」ですが、これを一読するだけで深浦の歴史の概要を知ることが出来ると思います。

この参考資料としては、深浦の歴史・文化財について、平成初期(約30年前)深浦の先輩である郷土史家「生方直方氏」の編纂した「深浦に就いて」等深浦文化シリーズ等を発表した資料を基に発行させていただきました。

また追浜地域運営協議会発行の、上杉孝良氏編「新・追浜歴史年表」の深浦に関する部分を引用させていただきました。記して厚くお礼申しあげます。

目 次

★はじめに	1
★目 次	2
深浦に就いて	
1 概要	3
2 生活	
3 土地	
4 交通	
深浦の文化財	
1 大国主社に就いて	
2 独園寺に就いて	
3 観音寺に就いて	
4 正禅寺と鉤切に就いて	
5 官修墓地に就いて	
6 夏島貝塚	
7 明治憲法起草の地碑	
8 予科練誕生之碑	
9 昭和天皇行幸之碑	

I 深 浦 に 就 い て

1. 概 要

① 御浦郡

三浦郡の旧地名は「御浦郡」であり、御浦郡は「日本書記」の持統天皇6年（古墳期692）5月の頃に記載されている。

※ 御浦郡は最初「御津」と称されたが、「津」としての重要性が無くなり、後に「御浦」となり更に「三浦」になったと考えられると伝う説がある。

「津」は港、船着場、渡船場、河口、河岸の意味がある。平安期に「御浦」が「三浦」に変化している。「三浦庄」は平安末期から南北朝期に使われた荘園名である。

衣笠庄は風土記にある庄名で、徳川期に使用された。

三浦郡と同じ地域で、現在の逗子市、葉山町、三浦市、横須賀市である。

※ 三浦郡は古事記の日本武尊東征伝説、平安期から中世迄は三浦一族の所領であり、近世はペリー来航等でよく知られている。古代から陸上・海上交通の要衝の地である。

※ 現在の深浦町内会管内の内、

浦郷町3丁目の旧地名は相模国三浦郡浦之郷村字深浦。

浦郷町4丁目は 浦之郷村字鉤切 であった。

② 御浦郷

「倭名抄」平安期の延長8年(930) に依ると、御浦郡に御浦郷・田津郷・氷蛭郷・御崎郷・安尉郷の五つの郷があった。大宝元年(701) の大宝令で中央集権体制が確立されて、国・郡・郷の行政区画が出来た。

③ 浦郷村

古文書・歴史書に初めて記載されたのは、永禄2年(1559) の古文書と、天正年間(1573~1591 戦国期) の小田原衆所領役帳で、続いて文化8年(1811) の「三浦古壽録」である。

④ 深浦

深浦の地名が古文書・歴史書に初めて記載されたのは、「三浦古壽録」続いて「風土記」である。 地名の由来は深く入り組んだ港の意味と伝わる。

⑤ 鉤切

鉤切の地名の由来は、源範頼伝説の他にいろいろあるようだが、よく分らない。源範頼伝説の詳細は「正禅寺と鉤切に就いて」の項目参照

⑥ 小字名

※ 深浦の小字名

字名は「深浦」「亀島」で小字名は「鉾切坂口」「家の谷戸」「石合」「小向」「中の上」「子の神」「牛久保」「見魚」「切通し」「坂中」「石場」「かんだいぶた」「寺の下」があった。

※ 鉾切の小字名

字名は「鉾切」で、小字名は「山之脇」「西鉾切」「東鉾切」「蒲ヶ谷」「追浜」「矢浜」「菖蒲ヶ入」と鉾切附属地として「夏島」「蒲谷新田」があった。

⑦ 統治・支配・行政・教育の変遷

※ 古墳期

持統天皇6年(692) 相模国守 布勢朝臣色布智

※ 奈良期

神亀元年(724) 神武寺が行基により創建。

天平勝宝10年(756) 御浦郡司 太田部直圀成

※ 平安期

延長8年(930) 前記 ② のとおり五つの郷があった。

康平6年(1063) 三浦氏の祖である村岡為通は、前九年の役に源頼義に従い、恩賞として三浦郡を与えられて衣笠城を築き「三浦氏」と称した。

天養2年(1145) 3月の官宣旨案に「三浦庄司・・・」とあるので「三浦庄」と呼称していた事がわかる。

※ 鎌倉期

治承4年(1180) 源頼朝鎌倉幕府開府し「榎戸湊」は鎌倉への物資取扱いの中心地であり、海上交通の要地であったので、幕府の直轄地になった。

宝治元年(1247) 宝治合戦により「三浦泰村」他三浦氏一門が減んでから、佐原盛時の領地となる。

文保3年(1319) 執権 金沢貞顕の支配。(金沢文庫文書)

元弘3年(1333) 新田義貞に依る鎌倉幕府滅亡。

永正13年(1516) 北条早雲(後北条氏)の支配になる。

※ 『相模守護職』

三浦景継 六郎左衛門尉 ～歴応元年(1338)

中条秀長 大夫判官 歴応元年(1338) ～

三浦高道(聖林) 三浦介 観応 2年(1351) ～

川越直重 弾正小 文和 2年(1353) ～貞治2年(1363)

三浦高道	三浦介	貞治 3年(1364) ~ 永和3年(1377)
三浦高道(徳桑)	三浦介	永和 3年(1377) ~ 永応9年(1402)
三浦時高	三浦介	永享元年(1429) ~
上杉定正	修理大夫	文明17年(1485) ~ 長享2年(1488)
上杉憲房	民部大輔	永正7年 (1510) ~
三浦義同(道寸)	三浦介	~ 永正13年(1516)

※ 江戸期

天正18年(1590) 豊臣秀吉が小田原城（城主北条氏直）を落城させてからは、徳川家康の領地となる。

文禄3年(1594) 代官に長谷川七左衛門長綱が任ぜられた。
浦賀愛宕山に代官屋敷があった。

天保3年(1646) 播州姫路藩 酒井雅楽頭忠誉の領地に。(15万石)

寛文4年(1664) 上州前橋藩 酒井雅楽頭忠清の領地に。

寛文6年(1666) 酒井雅楽頭忠清 幕府4代目の大老となり、浦郷・田浦・長浦3ヶ村が加増されて、三浦郡の所領は13ヶ村で3,438石余となっている。
「寛文印知集」

三浦郡の13ヶ村とは、浦郷・田浦・長浦・逸見・横須賀・中里・深田・公郷・佐原・久村・久里浜・鴨居・走水であった。

延享元年(1744) 武州川越藩 松平大和守朝矩の領地に (15万石)

寛延3年(1750) 浦郷（現在の追浜南町）に「浦郷陣屋」を設ける。

★ 享保(1716) から寛延(1750) 頃の浦郷村の村高は、「相模国郷帳」に依ると500石であった。

文化8年(1811) 会津藩 松平肥後守容衆の領地に。(23万石)

文政4年(1821) 武州川越藩 松平大和守朝矩の領地に。

★ 三浦半島の東京湾側の半分が大和守で、相模湾側は大久保加賀守の領地となる。

★ 天保11年(1840) 浦郷村の村高は村高帳に依ると267戸716石であった。

嘉永6年(1853) ペリー米国東インド艦隊司令官浦賀沖に来航する。

同年 ペリー艦隊は江戸湾に侵入し、夏島沖に停泊し、近海を測量した。

安政元年(1854) ペリー艦隊ミシシッピー号の水夫死亡につき、ペリー提督は夏島に埋葬することを希望するが、幕府の計らいで横浜村の増徳院境内の丘に埋葬する。現在の外人墓地の第1号である。

同年 横浜の応接所で神奈川条約（日米和親条約）が調印される。

同年 肥後熊本藩 細川越中守済護の領地に。(50万石)

安政4年(1857) 異国船防禦など嚴重な固めのため、浪人等の郡内立ち入りを防ぐため、郡境の浦之郷村（2か所）外3か村に高札・小屋番を設

ける。

文久3年(1863) 下総佐倉藩 堀田相模守の領地。(11万石)

慶応3年(1867) 徳川幕府の直轄地に戻り、代官は江川太郎左衛門。

★ 全国でも稀な支配の変遷を辿っているが支配大名10万石以上であった。

※ 明治以後

明治元年(1868) 徳川幕府大政奉還 神奈川県誕生
神奈川県三浦郡浦之郷村となる。

明治3年(1870) 鉦切 正禅寺塾が開かれる。

明治5年(1872) 戸籍法の施行。 戸籍編成のため三浦郡を10区に分
ち、浦之郷村、田浦村、長浦村、横須賀村、逸見村他5か村は1区となる。
名主、年寄の名称を廃し、戸長、副戸長に統一する。

明治6年(1873) 「学制」(太政官布告)による「小学教則」の制定により、
正禅寺塾を北浦学舎と改称、開校する。

明治7年(1874) 北浦学舎等を廃止し、自得寺を仮校舎として、名称を第
1大学区第10中学区第55番小学本浦学舎と改称する。
この年を現浦郷小学校の創立年と定めた。

明治8年(1875) 第55小学本浦学舎を第55番小学浦郷学校と改称する。

明治10年(1877) 公立小学浦郷学校が狭湊につき、本浦313番地に校舎
を新築する。

明治11年(1879) 郡区町村編制法の交付により、三浦郡浦郷村に。

明治14年(1881) 前年に本浦地区が大火に見舞われ、民家65戸を焼失、
小学浦郷学校等が類焼する。 学校は深浦 観音寺に移転し開校する。
教室が少ないため、鉦切だけ独立して正禅寺を校舎とした。

明治15年(1882) 第55小学浦郷学校は村立浦郷学校に改称する。

明治20年(1887) 浦郷村外3ヶ村組合で尋常高等併置の船越小学校が創
設され、浦郷村の高等科進学の子供たちは、以後昭和11年3月までここ
に通った。

明治21年(1888) 村立浦郷学校は公立浦郷学校に改称する。

明治22年(1889) 町村制実施で、浦郷村、船越新田、田浦村、長浦村が合
併して浦郷村となり、「旧浦郷村」は「浦郷村大字浦郷」となる。

同年 公立浦郷学校、神応校舎で授業を始める。

明治26年(1893) 公立浦郷学校は小学校令の改正により神奈川県三浦郡
浦郷村立尋常浦郷小学校と改称する。

明治40年(1907) 小学校の義務教育年限の4か年を6か年に延長された。

明治45年(1912) 尋常浦郷小学校、現在地に校舎新築、開校式を挙げる。

6月8日を創立記念日とする。

大正3年(1914) 町制を施行し、浦郷村から田浦町になる。 役場は船越に置かれた。

三浦郡田浦町浦郷字深浦・字鉤切となる。 浦郷村は永禄2年(1559)から大正3年(1914) まで355年記録上続いた。

大正12年(1923) 尋常浦郷小学校は、田浦町浦郷尋常小学校と改称する。

昭和8年(1933) 田浦町が横須賀市に合併し、横須賀市浦郷字深浦と字鉤切となる。

同年 浦郷尋常小学校は横須賀市立浦郷尋常小学校となる。

昭和11年(1936) 浦郷尋常小学校に高等科を付設、浦郷尋常高等小学校と改称。

昭和16年(1941) 「国民学校令」が公布され4月より横須賀市立浦郷国民学校となる。

昭和20年(1945) 8月15日 戦争終結の詔書が放送される。

昭和21年(1946) 浦郷国民学校を浦郷小学校に改称する。

昭和21年(1946) 新制中学校が発足し、浦郷中学校が浦郷小学校内に設置、開校するも12月に浦郷を廃止し、田浦中学校を旧防備隊跡（現在地）に新たに設置、開校する。

昭和23年(1948) 横須賀市浦郷支所が新たに設置された。 旧田浦憲兵分遣隊跡（追浜本町）に。 後追浜支所に変更。

昭和24年(1949) 石渡直次氏（深浦在住）、第20代横須賀市長に就任。

昭和26年(1951) 浦郷支所管内の町界町名地番整理実施。

浦郷町、夏島町、追浜町、追浜南町、追浜東町、追浜本町、鷹取町の7つの新町名に分割変更になった。（現追浜行政センター管内）

※ 深浦は浦郷町3丁目と5丁目、2丁目、追浜東町の一部に分割変更。

鉤切は浦郷町4丁目と5丁目の一部、夏島町に分割、地番も各々変更。

尚、現在の深浦町内会の範囲は浦郷町3・4・5丁目である。

日向は浦郷町1丁目、 榎戸は浦郷町2丁目に変更になった。

昭和29年(1954) 浦郷小学校創立80周年式典が行われた。

昭和30年(1955) 浦郷小学校分校（後の夏島小学校）が開校する。

校地は旧海軍鉤切用地に。

昭和35年(1960) 夏島小学校、浦郷小学校分校から独立して開校する。

同年 田浦中学校分校（後の追浜中学校）設置される。

昭和36年(1961) 追浜中学校、田浦中学校分校から独立して開校する。

昭和38年(1963) 県立追浜高等学校が開校した。

昭和47年(1972)	浦郷駐在所を榎戸から日向(現交番)に新築移転する。
昭和48年(1973)	横須賀市追浜支所を追浜行政センターと改称、公民館を併設して開館する。(現在の分館)
昭和49年(1974)	6月8日 浦郷小学校創立100周年式典が行われた。
昭和58年(1983)	田川誠一衆議院議員(日向在住)自治大臣、国家公安委員長に就任する。
平成6年(1994)	追浜行政センターが現在地に新築移転し、会館した。
平成13年(2001)	横須賀リサイクルプラザ(通称アイクル)が開業した。

2. 生 活

① 農間漁師

深浦は海に臨んでいる土地であるから、半農半漁の生活であり、三浦半島で云う「農間漁師」であった。 農の繁忙期には男性は漁を休んで農作業をする生活であった。

- ※ 明治期以降浦郷村は要塞地帯になり、海軍航空隊等の施設が建設された。そのため、軍事優先で漁場と時間は制限され、漁業以外の地場産業が無く生活は苦しかった。 しかし昭和になってから海軍施設拡充に伴って雇用の道が開かれて、就職の機会を得る事になり、生活はより豊かになった。
- 航空廠は地元であったので、就職の他、勤務者を下宿に置く家が多く、生活は一転した。 家業の手助けをしない者は、海軍工廠、航空廠等に就職した。

② 漁業

- ※ 江戸期には 浦郷、長浦、横須賀、公郷の4ヶ村は、4艘張船以外なら走水から江戸品川迄は断り無く漁をする特権を有する「立浦」であった。
- ※ 立浦とは本漁業の特権と幕府直轄の支配を受け、幕府に漁を上納し、巡検役人を船で渡す水府役を請負い、他の漁村より格をもっていた。
- ※ 夏島より猿島への見通し線内の海は、鰯その他が多く、他浦他国船の密漁船が無断侵入して係争が度々あった。
延宝6年(1768)より武州の漁民の密漁が数回あった。
- ※ 立浦漁民の漁獲品は将軍に 鯛、大奥に活魚を上納、江戸前の魚等を、江戸の人々の食膳に供されたが、その陰には漁民の労働と密漁との係争に大きな苦労があった。
- ※ 第8代将軍吉宗が、江戸・日本橋本船町に魚市場を開設する迄は鮮魚類の販売は立浦漁民の特権であった。

- ※ 武州小柴・富岡・本牧等の漁民は立浦漁民の許可が無ければ漁は出来なかった。
- ※ ペリー来航後 ペリー艦隊の浦賀来航後は、浦賀奉行所を中心に海岸防備が強化されて、漁民の課税の減額が無くなり、農民と同様に漁獲品の約1/3を上納し、「懸物役」として漁船にも税がかかり一定数の魚が徴収された。
その上年貢以外に賦役（漁船と水夫の徴発）、定普請、海上輸送、海上監視等海防の為に各種の重い課役に悩まされた。
そして不漁続きで漁民の生活は非常に困窮した。
- ※ 郷土史では深浦、鉾切、田の浦の3地区で漁船数238艘、漁獲品は鰻、ナマコ、エビ、鯛、カレイ、天草、海苔等の魚介類その他としている。
特に深浦、鉾切から小柴沖にかけてナマコが非常によく獲れたようであった。
しかし、海軍施設の拡充につれ、漁業は多大な発展を妨げ、区域も限定され漁業従事者である漁夫も職を転ずる有様で次第に減少した。

③ 漁業関係の古文書保存家

- ※ 屋号「よつや」（代々五郎兵衛）石渡貞男家
状 101通 最古延宝8年(1680) 341年前
冊子 111通 元禄4年(1691) 330年前
船持ちの網元積荷問屋で、江戸肴問屋西宮重次郎との関係文書や、ナマコ仕切状、人請証文6通、契約書等文化的価値のある貴重な文書多数を保有。
- ※ 屋号「新屋」（代々磯右衛門）
状・冊子系20通 宝暦2年(1752) 269年前
明治2年(1869) の横須賀軍港出入願やナマコ漁の契約書等
- ※ 近況
令和3年(2021) 10月現在の深浦の漁業従事者は14人で兼業者は3人である。
漁船数は5トン以下が10艘で、出荷先は殆どが横須賀東部漁業組合である。
主な漁獲品はワカメ、アナゴ、ナマコ、スズキ、タチウオ、メバル、コノシロ、黒鯛、鰯、車エビ等である。
- ★ 昭和55年(1980) より深浦湾の護岸整備工事着工し、深浦漁港を約2000㎡埋立て、漁業関連施設に使用すると共に、栈橋を構築して漁港としての機能整備を図っている。

④ 住民 口伝によると

- 何時の時代か不明であるが、昔深浦には家が6軒あったと云われる。
6軒は屋号で大谷戸、よしや、上の家、桶屋、鳥屋、安兵衛であり、一番古い家は

谷戸で、祖は金沢藩（米倉丹後守 元禄9年(1696) 禄高1万2千石）の足輕頭を勤めたと伝えるが、金沢藩は当地に所領が無いのでこの説には疑問を抱く。

（石渡米蔵氏の話 明治38年生）

この6軒の家伝の貴重品により存続年を確認すると、

- ※ 屋号「大谷戸」昔は「石渡戸」と称していた（墓碑により確認）が何時頃か不明であるが、「石渡」「渡戸」に分れ、現当主は「石渡」を称している。
現在墓碑・明暦元年(1655) 風化による碑名数基あり。
- ※ 屋号「よしや」明暦元年(1655) 366年前（以下令和3年現在）
昭和19年の強制立退き時に約300年経過したと伝えられる。
家伝の位牌は老朽化のため全て廃棄処分した。
- ※ 屋号「桶屋」 元禄2年(1689) 332年前
- ※ 屋号「鳥屋」 寛永2年(1749) 272年前
- ※ 屋号「上の家」 天明2年(1782) 239年前
菩提寺の自得寺は宝永2年(1625) 火災焼失した。
- ※ 屋号「安兵衛」法事の際、廃棄処分した為現在保存するのは明治以降で、以前のものは皆無で詳細不明。

⑤ 口伝にない他家の存続年（家伝の貴重品により調査）を列記すると、

- ※ 屋号「たなか」 明暦4年(1658) 363年前
- ※ 屋号「よつや」 延宝8年(1680) 341年前
- ※ 屋号「うきちゃん」 元禄元年(1688) 333年前

上記存続年の調査は一部で結論付ける事は難点があるが、此の種の「口伝」には虚報があるのは事実である。

⑥ 戸数・人口の推移

資料名	浦郷村（追浜地区）	
倭名抄	延長年間(923～930)	約50戸 1,000人
三浦古壽録	文化8年(1811)	250戸余
村高帳	天保11年(1840)	267戸
風土記稿	天保12年(1841)	267戸
皇国地誌	明治11年(1878)	397戸 2,274人
	明治24年(1891)	507戸 2,910人
浦郷村郷土史	明治44年(1911)	788戸 4,797人
田浦町誌	昭和3年(1928)	1,142戸 約5,700人
国政調査	昭和60年(1985)	11,606戸 34,788人

	平成2年(1990)	12,048戸 34,700人
住民登録	平成28年(2016)	14,897戸 31,946人
資料名	深浦(浦郷町3丁目)	
御興奉納帳	明治12年(1879)	約60戸
浦郷村郷土史	明治44年(1911)	117戸 673人
	昭和60年(1985)	418戸 1,201人
住民登録	平成6年(1994)	456戸 1,212人
	深浦(浦郷町3・4丁目)	
住民登録	平成31年(2019)	853戸 1,752人

⑦ 姓名の戸数推移

深浦は「石渡」「白井」「渡戸」姓が多く、鉈切は「蒲谷」姓であった。

	石渡	白井	渡戸	計	その他	合計
明治末期	43戸 65%	15戸 22%	5戸 7%	63戸 94%	4戸 6%	67戸
昭和20年	62戸 46%	17戸 13%	4戸 3%	83戸 62%	51戸 38%	134戸

以下は深浦町内会会員名簿での統計

昭和47年	66戸 18.5%	21戸 5.9%	3戸 0.8%	90戸 25.3%	266戸 74.7%	356戸
昭和61年	61戸 18.5%	24戸 7.3%	3戸 0.9%	88戸 26.7%	241戸 73.3%	329戸
平成6年	63戸 18.8%	23戸 6.9%	2戸 0.6%	88戸 26.6%	246戸 73.4%	335戸
平成30年	50戸 14.9%	20戸 6.0%	3戸 0.9%	73戸 25.1%	251戸 74.9%	324戸

⑧ 石渡の姓について

石渡は深浦に多い姓だが、昔範頼が舟ではなく石伝いに渡って逃げた時に手助けした漁師に対して与えられた由緒ある姓と伝えられている。

⑨ 屋号

深浦・鉈切では上記の様に同姓が多かったのも、各々屋号で呼ばれた。

※ お茶屋・魚屋・上の店・七右衛門・江戸屋・安兵衛・富田屋・安さん・鳥屋・ぺっぺさん・平蔵・宇兵衛・亀島屋・ウキちゃん・魚忠・半蔵・平松屋・桶屋・六右衛門・ヨハベ・又七・伝五郎・喜之助・スナタ・よつや・たなか・大谷戸・与兵衛・久五郎・麻屋・煙草屋・隠居・新屋・新小買・治の助・

しんでん・石ぐら 等がある。 現在でも一部で呼ばれている。

⑩ 町内会組織

※ 戦前の昭和期に「旧深浦町内会」「旧鉾切町内会」が其々存在した。

また、其々青年会・消防団組織があり町内会と共に祭礼・盆踊り等を行っていたとのことです。 しかし、当時の組織の詳細は不明である。

※ 昭和15年(1940) 北郷聯合町内会があり、現追浜地区の町内会は深浦、榎戸、日向、本追浜の他全部で11町内会があった。(横須賀市町内会整備要綱)

★ 当時の鉾切在住「蒲谷卯之助氏」の青年会についての話。

「青年会は15歳から入り、世話方と小頭という階級があり、この人達が役員だった。小頭が一番上で二人いた。 世話方は6～7人いた。 そしてその人たちが言ったことは絶対聞かなければならなかった。」 とのことであった。

※ 昭和22年(1947) GHQ訓令で戦前からの町内会組織は解体された。

※ 昭和25年(1950) 1月 新たな町内会組織「深浦町内会」が発足した。

管轄区域は深浦と人口減少した鉾切が合併して、発足した。

初代会長に 石渡徳次郎氏 就任する。

※ 平成元年(1989) 4月 深浦町内会館を現在地(市有地)に新築移転した。

会館用地(面積163・71㎡)は町内会と横須賀市との間で 30年間の「土地賃貸借契約」を締結した。

尚、旧会館用地(現おかむら寿司)は地主に返還した。

3. 土 地

① 新田の埋立て

※ 明治元年(1868) 深浦と榎戸の境を新田開発し、後に宅地となる。

「しんでん」と呼ばれる屋号の家も出来た。

※ 明治4年(1871) 鉾切の蒲谷新田の埋立て着工し、明治12年(1879) 完成した。

面積約3万平方メートル

※ 大正7年(1918) 当時の深浦湾の奥の尖った「浜田屋」「平松屋」の間の海は平松屋の渡戸竹次郎氏が村の世話役をしていた時に、青年会・消防団が主体となって、埋立て、共同用地として使用した。

関東大震災で約1㍍隆起した。

② 軍用地への買収と強制立退き

- ※ 明治元年(1868) 横須賀製鉄所(後の横須賀海軍工廠)が徳川幕府より明治政府の所轄となり、政府は横須賀一帯を要塞地帯化を計画した。
- ※ 明治13年(1880) 夏島(鉾切住民の共同所有地)が買収される。
- ※ 明治32年(1899) 要塞地帯法が公布され、浦郷村も軍事の重要拠点となり、その後順次終戦まで土地・家屋の買収と強制立退きが行われた。
- ※ 明治43年(1910) 海軍水上機練習所として、追浜海岸一帯が海軍により接収され、その地先の埋立てが承認された。
- ※ 明治44年(1911) 深浦・亀島周辺一帯が海軍によって買収され、横須賀海軍建築部深浦出張所が開設される。
- ※ 明治45年(1912) 飛行場拡張のため、海軍は夏島地先公有水面の埋立て着手。
- ※ 大正元年(1912) 追浜に航空機格納庫1棟と滑走台の建設に着手。
- ※ 大正5年(1916) 海軍航空隊開庁し、その後飛行場用地として、埋立て土地造成が行われた。
- ※ 昭和5年(1930) 頃から昭和19年(1944)にかけて鉾切は約300戸の家が順次、強制立退き命令により、他の地域に移転した。
よって鉾切の民家は数件のみとなった。
- ※ 昭和6年(1931) 航空廠建設工事に先立って、居住者の本店(ホンダナ)、よつや、安兵衛、仁兵衛、の家は海軍より強制立退き命令により移転した。
- ※ 昭和7年(1932) には航空廠が設置された。
- ※ 昭和8年(1933) 道路が新設された際、大正7年に埋立てした用地の一部が道路用地となり、明治44年開通した追浜トンネルと接続し、同時に榎戸・日向トンネルも完成開通し、現在の市道船越・鉾切線が全通した。
深浦では新道建設の際、両側の何軒かの家が移転し現在ようになった。
- ※ 昭和16年(1941) 独園寺の墓地の一部が水上機試験水槽建設に伴い、強制立退きさせられた。 詳細は「独園寺に就いて」を参照
- ※ 昭和18年(1943) 海軍地下工場建設により、深浦トンネル東側、大国主社東側、独園寺入口東側の堀削が開始された。 堀削した土砂の一部は、現光工業の土地に搬出して埋立てられ、大部分は深浦トンネルの入口左側から魚忠前までと深浦トンネル東町出口の両側の家屋を強制立退きさせた跡地に搬出し堆積された。
- ★ 浦郷町3丁目24周辺は 昭和20年(1945) 8月20日迄に強制立退き命令を受け移転準備中に終戦を迎えたと云う。
- ※ 深浦の立退きの例 某家は昭和6年に第1回の移転をし、新居を深浦に構えた。
昭和18年に地下工場の発掘土砂の廃棄用地に収容されて、第2回の立退きとなり追浜東町に移転した。 家屋は地下工場の発削事務所に使用さ

れて解体撤去を逃れたので、終戦後に元の家に戻った。

★ 鉤切では、強制立退きを4回受けた人がいたと云う。

★ 尚、戦前は横須賀・三浦地区の海岸線全域は、要塞地帯法により軍事機密とされ、付近住民の軍事施設への立ち入り、丘陵地帯への無断な立ち入り、写真撮影、等が厳重に禁止されて、当時の様子の記録、写真等は殆ど残っておりません。

③ 戦後の変遷（旧軍用地・企業・住宅等）

※ 昭和20年(1945) 8月 現在の浦郷町5丁目・夏島町にあたる軍用地（海軍航空廠・追浜海軍航空隊飛行場等）は米進駐軍により接收された。

同時に横須賀海兵団（稲岡町 現米国海軍基地）にも進駐。

※ 昭和22年(1947) 3月 光工業株式会社（浦郷町3丁目）設立される。

※ 昭和22年(1947) 12月 日本和紡興行株式会社（浦郷町5丁目）設立される。

※ 昭和23年(1948) 8月 米陸軍特需会社富士自動車が横須賀海軍航空隊跡地に進出、米軍の車両修理・再生を主要業務として米軍と契約。 昭和3年(1958) までに再生した米軍車両は、のべ22万9,100台の及んだ。

※ 昭和24年(1949) 4月 追浜運動公園が開設される。

※ 昭和24年(1949) 7月 石渡直次氏（深浦在住）第20代横須賀市長に就任。

※ 昭和24年(1949) 10月 米軍より旧海軍航空技術廠10万坪（総数約60万坪 現浦郷町5丁目）日本政府に返還された。 同年11月追浜運動公園の追浜球場が竣工し、プロ野球の公式戦が行われた。

※ 昭和25年(1950) 6月 接收解除後、返還され「旧軍港市転換法」が公布・施行され、旧軍港市の平和産業港湾都市への転換が図られるようになる。主な目的は国有財産の払下げに伴う特別待遇であった。

※ 上記法律の公布・施行に当たっては、前年昭和24年7月 就任の石渡直次市長（深浦在住）の国に対しての強力な陳情の成果であったという。

よって、後に深浦・鉤切地区に多くの企業が進出し工業団地となった。

また追浜運動公園・行政施設・学校等の公共用地となりました。

※ 昭和25年(1950) 9月 太陽商事株式会社（浦郷町3丁目）設立される。

※ 昭和25年(1950) 11月 京浜発條株式会社（浦郷町5丁目）設立される。

※ 昭和29年(1954) 浦郷町4丁目に 県立横須賀公共職業指導所 が開設。

その後、平成20年(2008) 3月 54年間で閉鎖された。

★ 平成27年(2015) 4月 その跡地に60戸の分譲建売住宅が完成し、入居者は浦町内会に入会した。（23組～26組）

※ 昭和33年(1958) 6月 株式会社オカムラ（浦郷町5丁目）操業開始する。

※ 昭和34年(1959) 6月 追浜米陸軍兵器廠跡地約47万5千坪が14年ぶりに返還

されることになり、返還式が行われた。

★ 同年 日産自動車株式会社 追浜地区払下げの申請をした。

※ 昭和35年(1960) 4月 イシカワ製作所株式会社(浦郷町5丁目) 開設される。

※ 昭和35年(1960) 6月 関東自動車工業株式会社(浦郷町5丁目) 操業開始。

★ 平成12年(2000) 工場が閉鎖され移転した。39年間の歴史であった。

※ 昭和35年(1960)10月 東邦化学工業株式会社(浦郷町5丁目) 開設される。

※ 昭和35年(1960) 10月 追浜工業会が結成される。

(第2次接收解除により進出した企業で組織)

※ 昭和36年(1961) 4月 日神機工株式会社(浦郷町5丁目) 設立される。

※ 昭和36年(1961) 6月 追浜プレス企業組合(浦郷町3丁目) 設立される。

※ 昭和37年(1962) 2月 日産自動車株式会社 追浜工場 操業開始する。

※ 昭和37年(1962) 6月 株式会社青木製作所(浦郷町5丁目) 設立される。

※ 昭和37年(1962) 6月 シンジーテック株式会社(浦郷町5丁目) 設立される。

旧海軍航空技術廠本庁舎に入居する。(旧 北辰工業株式会社)

※ 昭和38年(1963) 10月 株式会社瀧澤鋳機製作所(浦郷町3丁目) 設立される。

※ 昭和39年(1964) 4月 有限会社栄光製作所(浦郷町5丁目) 設立される。

※ 昭和44年(1969) 4月 海軍航空技術廠水上機試験水槽地は国より横須賀市に移管され、そこに「市営深浦改良アパート」が完成し、75戸が入居した。

★ 平成27年(2015) 11月 老朽化のため、解体することになり入居者の移転完了。令和3年(2021) 11月解体され更地に。46年の歴史。

※ 昭和44年(1969) 9月 夏島運輸株式会社(浦郷町5丁目) 設立される。

※ 昭和46年(1971) 12月 住友重機械工業株式会社(夏島町) 操業開始する。

※ 昭和47年(1972) 4月 旧第1航空技術廠、横須賀海軍航空隊及び附属追浜飛行場の土地が返還され、この日までに接收地全地域が返還される。

※ 昭和48年(1973) 12月 海洋科学技術センター(現海洋研究開発機構)が開所式を挙げる。

※ 平成8年(1996) 4月 深浦町内会館前の「浦郷みなと緑地」と深浦漁港整備事業と「深浦ボートパーク」が完成した。

緑地は町内会でも運動公園・夏祭り演芸広場として活用している。

※ 平成13年(2001) 横須賀リサイクルプラザ(通称アイクル)が開業した。

※ 平成14年(2002) 5月 有限会社坂庭資源開発 深浦に移転事業開始した。

※ 平成17年(2005) 12月 株式会社マルコ(浦郷町5丁目) 操業開始した。

※ 平成18年(2006) 4月 株式会社東京ガス横須賀パワー 竣工発電開始した。

※ 平成22年(2010) 11月 夏島都市緑地に第三海堡の遺跡展示場が開設される。

※ 平成23年(2011) 4月 グループホーム「あんずの家」業務開始した。

- ※ 平成24年(2012) 5月 深浦の最高地点「見魚台」と呼ばれる台地にマンション「ルネ追浜」 一期工事竣工し、以後3年間で3街区490戸が入居した。
同時にマンション北側の「浦郷3丁目公園」を開発業者が市に提供した。
尚、マンション敷地は昭和63年(1988) 開発業者により買収されたが、不動産バブル崩壊のため、24年後まで建物の建設が遅れた。
- ※ 平成27年(2015) 4月 「あすりはデイサービス」 アイ・ライフ・サポート合同会社(浦郷町3丁目) 業務開始する。
- ※ 平成29年(2017) 4月 浦郷町4丁目12 日産自動車浦郷寮の敷地最深部の土地を不動産開発業者により、60戸の分譲建売住宅が完成した。
入居者は深浦町内会に入会した。 (27組～31組)
- ※ 令和元年(2019)6月 深浦「天子台」の約450坪の敷地に介護付有料老人ホーム「花珠の家 よこすか」が落成し開業した。
- ★ これで深浦の丘陵部分(見魚台・天子台) の土地は7階建マンションと4階建老人ホームのビル建設により、深浦湾からの風景が大きく変わりました。

4. 交 通 (海上交通・鉄道・道路とトンネル)

① 海上交通

榎戸を挟んで、日向、深浦、丘を背に巡らした三村が湾の海辺を分担し、日向の舟大工、深浦は漁業を主とし、湊の榎戸には商店と、細やかな歓楽もあって人々は、この独立する生活圏の中で安らかに暮らしてきた。

榎戸湊は鎌倉時代からのもので大いに栄えた。

明治になり横須賀(吉倉)、 横浜に行くにはポンポン発動機渡船就航は近代化のはしりで、大いにいに賑わった。

しかし、昭和初期国道16号線開通と京急追浜駅が開業すると、不便な渡船は、たちまち廃業し、取り残された湊は急激に軍用化の途を歩んだ。

- | | | | |
|--------|-----------|----|-----------|
| ※ 定期航路 | 横須賀～榎戸～金沢 | 船賃 | 榎戸～横須賀 6銭 |
| 不定期航路 | 榎戸～横浜～東京 | | 横須賀～金沢 8銭 |

② バス

バスが横須賀線田浦駅から、深浦のやぐら(桶屋の前の山) 前迄開通した。

バスは米国製の6人乗りで、田浦駅 ～ 榎戸間 1日15往復 田浦駅～深浦間 1日7往復したと伝えられる。所要時間は約15分であった。

深浦迄の開通時期は不詳であるが、鉾切迄は明治44年(1911) 2月追浜トンネル開通以降と思われる。 鉾切の油屋が終点であった。

※ 現在「田浦駅・深浦循環・追浜駅」「日産自動車・磯子駅」間の2路線がある。

★ 深浦在住「金沢友治氏（元町内会役員）」の当時についての話。

「バスは、田浦駅を出て船越を回って日向（梅田旧道）に出て、大久保トンネルを
通って田川宅に下りてきて榎戸に出て、能永寺前から旧道の海のへりを通して山
の手に入って、魚元さんのところを回って七曲りの平松屋に出て、鉾切に行ってい
た。」とのことであった。

③ 鉄道

※ 明治22年(1889) 横須賀線が開通し、横須賀駅開業した。

※ 明治37年(1904) 田浦駅が開業した。

※ 昭和5年(1930) 京浜急行 黄金町・浦賀間が開通し、追浜駅が開業した。

※ 昭和8年(1933) 浦賀・品川間直通運転開始される。

※ 昭和47年(1972) 11月 追浜駅の橋上駅舎が完成、営業を開始する。

※ 平成11年(1999) 7月 追浜駅がダイヤ改正でラッシュ時を除き、普通車のみの
停車駅となった。

④ トンネルと道路

※ 梅田トンネル 明治20年(1887) 地元民によって 日向・船越間で 開通する。

※ 筒井トンネル 明治38年(1905) 榎戸・追浜東町間で 開通する。

※ 深浦トンネル 明治44年(1911) 独園寺第11世至道泰嶺和尚が手掘り堀削して
開通した。 詳細は「独園寺に就いて」を参照

※ 追浜トンネル 明治44年(1911) 開通。それ迄は深浦から鉾切に行くには鉾切坂
を登って山越えし、正禅寺脇に出たが、開通後は道が平になり近くなった。
昭和8年(1933) 10月に拡幅され内部をコンクリート打込みに整備された。
平成元年(1989) にも内部が改装された。

※ 榎戸トンネル・日向トンネル 昭和8年(1933) 横須賀市と合併の際、鉾切から船
越までの新道建設するとの条件の中で、追浜トンネルの拡幅、深浦・榎戸
間の榎戸トンネル、日向・梅田間の日向トンネルが開通した。

この道路は深浦の幹線道路で現在の「市道船越・鉾切線」になっている。

※ 国道16号線とトンネル 大正14年(1925) 国道31号（現国道16号）浦郷トン
ネル（現在地）竣工する。 この年、改修工事も田浦・吉倉間を除き完成。
又、本浦駐在所から航空隊正門迄（現夏島貝塚通り）幅9mも完成する。

★ 昭和3年(1928) 国道31号（現国道16号）現追浜町から逸見迄7つのトン
ネルで結ばれ開通する。 その後、観音崎迄が国道16号線となった。

★ 昭和36年(1961)3月 国道16号 新浦郷トンネル竣工する。

これで、上下線2本のトンネルとなり、4車線化した。

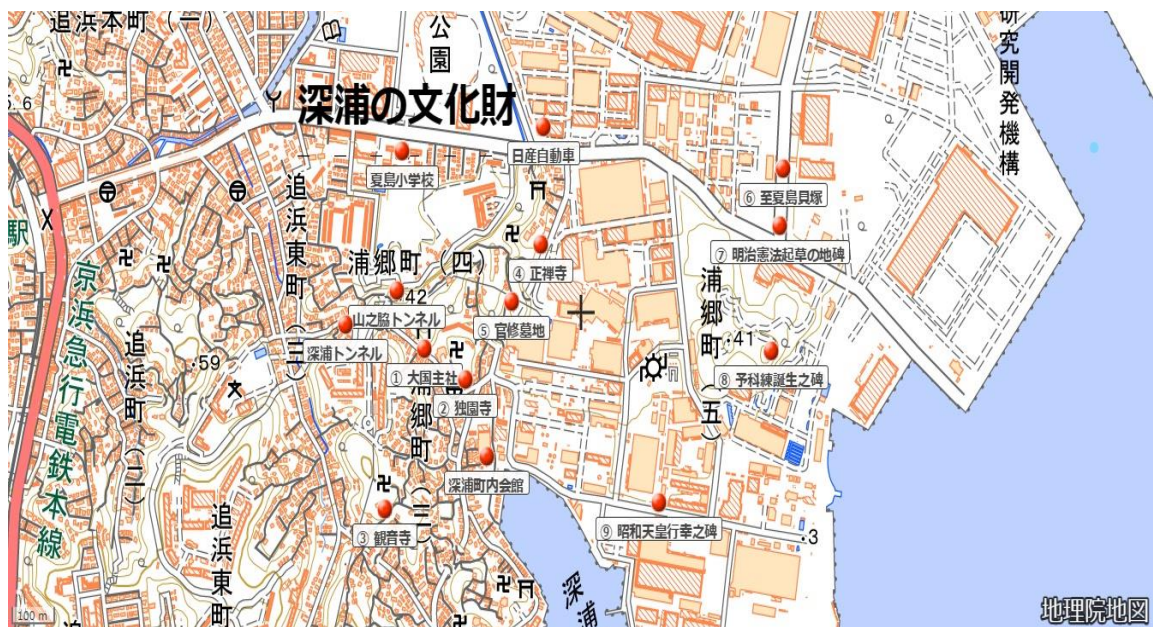
- ※ 夏島貝塚通り 平成8年(1996) 市が募集した道路の愛称に「夏島貝塚通り」と命名された。追浜駅前～海洋科学技術センター入口迄、3.5km。
- ※ 山之脇トンネル 平成20年(2008) 浦郷町3丁目・4丁目間に竣工。
マンション「ルネ追浜」建設に伴い開通したもので、夏島町交差点付近より追浜東町2丁目迄の道路が、新たに開通した。
- ※ 国道357号(東京湾岸道路) 延伸建設計画国道 国道357号は、千葉市より横須賀市に至る延長80km(神奈川県区間は延長35.1km)の一般国道です。金沢区の埋立て地から終点部となる夏島町までの区間については昭和63年(1988)6月都市計画決定がされ、平成5年(1993)に八景島まで開通したが、その後長期にわたり未整備の状態が続いていました。
- 平成30年(2018)7月 やっと八景島から夏島町交差点まで工事期間10年の計画で着工されました。しかし、浦郷3町内会と追浜連合町内会では夏島交差点以南の延伸計画が未定のため、計画の早期具体化を図ることを国、市に対し要望してます。このままでは浦郷・追浜の道路は大渋滞となり、生活に大きな影響が出るものと懸念されます。

Ⅱ 深浦の文化財

- | | |
|---------------|---------------------|
| ① 大国主社 | 詳細は「大国主社に就いて」を参照 |
| ② 独園寺 | 詳細は「独園寺に就いて」を参照 |
| ③ 観音寺 | 詳細は「観音寺に就いて」を参照 |
| ④ 正禅寺 | 詳細は「正禅寺と鉾切に就いて」を参照 |
| ⑤ 官修墓地 | 詳細は「官修墓地に就いて」を参照 |
| ⑥ 夏島貝塚 | 詳細は「夏島貝塚に就いて」を参照 |
| ※ 深浦・鉾切にある記念碑 | |
| ⑦ 明治憲法起草遺跡記念碑 | 詳細は「明治憲法起草遺跡記念碑」を参照 |
| ⑧ 予科練誕生之碑 | 詳細は「予科練誕生之碑」を参照 |
| ⑨ 昭和天皇行幸記念碑 | 詳細は「昭和天皇行幸記念碑」を参照 |

深浦の文化財 案内図





① 大国主社に就いて

概要

所在地

横須賀市浦郷町3丁目41番地

(旧地名・番地) 横須賀市浦郷字深浦3, 987番地

創建 寛永2年(1625) 令和7年(2025) 満400年を迎える。

祭神 大国主命・宇賀之御魂神・事代主命

社殿 明治16年(1883) 11月再建

本殿流造4坪・幣殿1坪・拝殿入母屋造5坪

3棟1字 瓦葺木造建造物

※ 平成15年(2003) 12月 老朽化した社殿の改修工事を行った。

耐震化のため瓦葺屋根から銅板に新しく葺き替え軽量化を図り、内外装を改修し、奉納された石灯籠一対を新設し、鳥居も塗り替えた。

総工費650万円は深浦町内の皆様の寄進により、猪狩工務店が改修工事を行った。

境内 129坪(約426平方メートル)

鳥居 「神明鳥居」で鉄製の朱塗りである。 造立年月は不詳

氏子 令和2年(2020) 現在 380戸 約1,200人

神輿

大神輿 祭神は須賀大神

※明治12年(1879) 深浦の約60戸で奉納された。

※大正12年(1923) 彩色・補修をしている。

※平成21年(2009) 解体修理・修復工事が竣工し町内に披露した。

工事業者は鎌倉市一二所 株式会社東京神輿センター

神輿本体分解・再組立て・本漆塗り直し・金具取り外し・金メッキ再処理後の取付け等の工事をした。

総工費528万円 氏子会・町内会・柏樹会で負担した。

中神輿

※令和2年(2020) (財) 矯正協会より新規購入した。

台車含み金70万円 町内会・柏樹会で負担した。

旧中神輿は老朽化し渡御時危険なため、供養し廃棄した。

子供神輿

製作者 導入時期等詳細は不明です。

山車(屋台)

※昭和29年(1954) 新調した。 山車新調の采配は白井若次氏で氏子各位の寄進により、約15万円を要した。 当時の氏子総代は石渡万之助氏
製作者は馬堀町の宮大工 岩沢大吉氏である。

祭礼

春季祭礼 毎年3月 第1日曜日

夏季祭礼 毎年7月 第3土曜日 宵宮 第3日曜日 本祭り

秋季祭礼 毎年10月 第1日曜日

初詣 元日 午前0時より

浄水盥

枕型 火成岩

高 39cm 上辺幅 88cm 下辺幅 80cm

上面立幅 30cm 横幅 88cm

池 花頭型に刳込 縦 26cm 横 26cm 深 6cm

銘文 奉納(前側面) 願主 石渡五郎左衛門

力石

1基 長丸形の川原石 江戸時代もの ?

寸法 縦 80cm 横 24cm 厚さ 32cm

※ 銘 四十五𠂇 約170kg 白井三治(担いだ記念署名)

昔は祭礼時に若者は力自慢を競った習慣があった。

追浜地域の社寺で力石の所在するのは大国主社のみである。

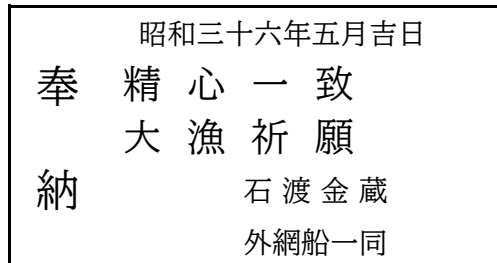
この力石は民族資料として後世に伝えられる可きと思考される。

御神木

境内の銀杏樹2株 昭和3年(1928) に昭和天皇御大典記念樹として植樹されたものである。 また昭和天皇御在位60年及び平成御大典記念樹がある。

金文字の額

※拝殿前面に立派な金文字の額が掲げられてある。 (文字は縦書き)



漁民が大漁満足・海上安全
を祈願したものである。

由緒沿革

※ 元和5年(1619) に開創された独園寺の鎮守社として、寛永2年(1625) に独園寺境内に創建された。 当初の社名は「大黒天社」で、度々改名されて現在の「大国主社」になっている。

当初の祭神は大国主命(大黒天)と恵比寿天の木造があった。

その後、大黒天社祭神の恵比寿天像は慶応3年(1867)の王政復古、明治元年(1868)の神仏分離で独園寺に返戻された。

※ 鎮守社創建の頃の深浦(浦郷町3丁目)は漁業が非常に繁栄した時代で、農業は従の半農半漁で、三浦半島で云う農間漁師であったから、漁業の恵比寿さん・農業の大黒さんは絶大な信仰を得て、近村からの参詣者は非常に多かったとのこと。

※ 大黒天社創建時の深浦には、村の鎮守社が無かったので、村の人々は独園寺の鎮守社を村の鎮守様のように崇敬した。

神社名の変遷

寛永2年(1625)	大黒天社	風土記 (創建時)
明治21年(1888)	甲子社	陸軍地図
明治27年(1894)	深浦社	浦郷村地図
昭和3年(1928)	大国主社	田浦町誌
昭和28年(1953)	大国主社	法人登記簿

祭神について

大国主命 = 大国主神 = 大国主大神

別称を 大己貴神(オオマナムチノカミ)、大己貴命(オオナムチノミコト) 等多くの名がある。

※ 七福神の一人で、笑った顔で右手に打出のこ小槌、左肩に袋を背負い米俵の上に立つ姿で表せる代表的な福德神であり、農耕神・国土開発・縁結びの神とし

て信仰されている。

※ 出雲神話の主人公で因幡の白兔神話で有名である。

※ 大国主命を主神とする神社は、島根県大社町の出雲大社と奈良県桜井市の大神神社（おおみわじんじゃ、最古の神社）である。

大国主社に合祀された旧稲荷社・旧亀島明神社について

※ 旧稲荷社

大黒天社への合祀は明治16年(1883) 社殿が再建された際に、稲荷社の社殿が老朽化したので合祀した。

稲荷社の祭神は 宇賀之御魂神（うがのみたまのかみ）所在地は屋号又七さん（現在の白井信行氏）の上にあって、そこには榊の大木があったが、社殿の規模は不詳である。

※ 旧亀島明神社

創建は寛文12年(1672) 大黒天社より47年後の創建。

祭神は事代主命（ことしろぬしのかみ）

所在地は現在の浦郷町5丁目東邦化学工業株式会社構内にあって創建当時は周囲220メートルの亀の形に似た小島で、枝振りの良い見事な老松樹があり灌木が密生していた。

明治44年(1911) 亀島に横須賀軍港防波堤築造工場が出来て深浦湾の東側が埋立てられた。 その時亀島の東側は崩されて岸に接続された。

昭和3年(1928) 亀島明神社の境内が海軍用地として買い上げられたので、大国主社に合祀された。

② 独園寺に就いて

概 要

所在地

横須賀市浦郷町3丁目42番地

（旧地名・番地）横須賀市浦郷字深浦3, 985番地

宗派 禅宗・臨済宗・建長寺派

創建 元和5年(1619) 令和元年(2019) 創建満400年

開山 一峰幹在和尚

自得寺第4世住職・正禅寺住職となり、その後隠居して独園寺を開いている。

本尊 木造の 木造の宝冠釈迦如来坐像

寺宝 木造一峰幹在座像・恵比寿神半跏像・薬師如来立像・阿弥陀如来坐像・地藏菩薩坐像等の木造や涅槃画像が残されている。

独園寺について

※ やぐら

この寺の境内には室町時代と思われる「やぐら」や「五輪塔」が多数祀られて、一峰幹在和尚以前にも寺が在ったのではないかと推定される。

※ 古い墓地の西側には「やぐら」が7～8穴あり古老の話では、当時は土葬であったため、この「やぐら」に仮埋葬し、七回忌の法事を済ませると掘り出して洗骨し、各自の墓地に埋葬するのが深浦の習慣であった。
また出産の際の汚物はビンに入れ、この「やぐら」に捨てたのでビンが山となっていたとのこと。

※ 創建以前の墓地について

墓地には当寺の檀家は無く、他寺の檀家の墓塔が30数基あり、多くは自得寺、良心寺等の檀家で皆深浦の旧家である。

自得寺、創建 明徳年間(1390～93) 従って開創以前の当時の境内は深浦の共同墓地的な存在であったと思われる。

※ 庚申塔

寺の入口にある庚申塔は、上部が欠けているが年代的には古いもので「寛」という年号が読み取れ、江戸中期の庚申塔といえる。

右の庚申塔は明治15年(1882) 6月の造立で施主は石渡作五郎とあり、日月・三猿・合掌清画金剛が彫られた駒形庚申塔である。

※ 独園寺の鎮守社

元和5年(1619) 独園寺が開祖されると、寛永2年(1625) に境内に鎮守社が創建された。

社名は 大黒天社（現在の大国主社）

祭神は 大黒天像・恵比寿天像

明治期神仏分離で大黒天社は独立し、深浦の鎮守様となった。

祭神の恵比寿天像は独園寺に返還された。

※ 半鐘

元禄13年(1700) 10月15日 石渡五郎左衛門（現浦郷町3丁目 屋号・しんでん 石渡郁夫氏の先祖）の寄進である。

★ 後日談 この半鐘は戦時中、供出したが終戦後、返却通知があり受取に行ったが、先着の某寺が持ち帰ってしまい、やむなく残った鐘の中から一つ持ち帰ったとのこと。しかし何年か後に某寺より、お返ししたい旨連絡があり、無事に返還された。

※ 深浦トンネルについて

明治44年(1911) 独園寺第11世道泰嶺和尚が手掘りで、開通させた。

人と大八車が通れる高さ1.8m 幅1.2mの素掘りのトンネルであった。

トンネルが出来る迄は追浜に行くには、観音寺の坂、天子台の坂、又は深浦トンネルの上を登って東町に出たので、非常に便利になり喜ばれた。

昭和7年(1932) 海軍航空廠が開設され、追浜駅よりの主要道路となり現在の大きさに拡幅され、通勤の人達で行列をなしたという。 しかし、内部は素掘りのため落盤防止に部分的に天井にトタン屋根を設置した保護設備が出来、数箇所に裸電球が点灯された。

昭和47年(1972) に大改修され、その後も数回改修されている。

※ 水上機試験水槽建設に伴う墓地の一部移転について

昭和16年(1941) 海軍航空技術廠水上機試験水槽2基建設のため独園寺の裏山の墓地を切崩す為に、強制撤去命令が出て移転を余儀なくされた。

移転先は、南側（現在の山上墓地）に墓地を新設した。

- ★ 終戦後、試験水槽は解体撤去され、敷地の大部分は横須賀市に移管され市営深浦改良アパートになった。 現在のイシカワ製作所株式会社に隣接した市道上にコンクリートガードの構築物が一部残っている。

※ 昭和30年(1955) 境内に「大東亜戦争戦没者慰霊塔」が建立された。

③ 観音寺に就いて

概 要

所在地

横須賀市追浜東1丁目71番地

(旧地名・番地)横須賀市浦郷字深浦4, 191番地

宗派 浄土宗 良心寺末

開山 貞享4¹ 貞享4年(1687) 清蓮社布誉万 和尚

開基 鎌倉屋長右兵衛 武州豊島郡江戸本船町

本尊 木像十一面観音菩薩像

室町時代後期の作と伝える伝説として、日本橋のご隠居が思い立って諸国修行の旅に出て、日向の国の岩屋で一夜を過ごした。 その時夢枕に観音様がたち、女人の安産、子育てを受けるようお告げがあった。

その後、船で東国に向かう途中に暴風に遭い、難破し深浦に漂着した。

そして、ここぞ有縁の土地であるということで観音様を祀ったと云われている。

安産・子育ての観音として信仰が厚い。

普段は厨子（理由は不明だが、扉には葵の紋と桐の紋が彫られている）に納められている。

12年毎の午年（うまどし）に本開帳、丑年（うしどし）に半開帳をしている。

航海安全、大漁祈願の寺として、深浦の漁師の人たちの信仰を集めている。

寺宝 七観音像（千手観音像・如意輪観音像など）

本尊を囲むように祀られている。弘化3年(1846) 深浦、鉾切など近隣の信者が寄進し鎌倉の仏師三橋永助が造立したものと云われる。

※ 阿弥陀三尊像

七福神 寿老人

観音寺について

※ 三浦三十三観音第二十二番札所で、以前は住職がいたが現在無住職になっており良心寺の兼務寺である。

※ 寺は墓なし（ただし初期の住職の墓はある）檀家なしである。

現在お寺の管理は世話人が行っている。

※ 昔から観音信仰の隆盛さを物語るものとして、沢山の絵馬が本堂に祀られている。

※ 明治14年(1881) 浦郷小学校は校舎火災のため、7年間観音寺を仮校舎とした。

周辺について

※ 周辺は見魚台（きんぎょだい）と呼ばれた台地（現在のルネ追浜マンション）の南端に位置し、眼下は深浦湾・猿島・小原台・前面に東京湾を隔て房総半島を望み、左には夏島・金沢沖・本牧沖が眺望できる風向明媚な景勝の地であった。

朝倉能登守埋蔵金伝説

※ このあたりは朝倉能登守の城址という説があり、観音寺は本丸跡といわれ、正禅寺裏山に砦と思われる遺構が、大手は筒井トンネル上の丘陵地、搦手は深浦トンネル上の丘陵、館は正観寺寄りで榎戸湊が視界に入り、口伝では「別宅」と言われた埋蔵金伝説が残っている。昔から浦郷一帯に「朝日さす 夕日輝くもろの木に 漆千杯銭が十億万両」と語り継がれた歌がある。

昭和初期には付近が掘られたが、埋蔵金は発見されていない。

昔の様子 元深浦町内会々長「石渡万之助氏」の話。

★「昔は境内に桜の木がたくさん植えてあり、お花見で賑わった。松の木の太木も多く子供5、6人で廻るほどの太さであった。お十夜には近郊から大勢お参りに夏の楽しい行事で、午後は露天商が境内に天幕を張り、夕方になり鉦や太鼓になると老

いも若きも提灯を持って坂道を駆け上がっていった。お十夜には子供たちは夜店が目当てで、若衆は娘さんが目当てであった。大正の初期までは大相撲もかかった。」とのことであった。

浦郷八景について

※ 安政5年(1858) この風景を文人旭松閣吉隆が「浦郷八景」として詠んだ。

夏島秋月	夏島や四方の海原うちはれて、ながねつきせぬ秋の月
勝力帰帆	もののふの矢よりも早き勝力の、真帆うちかけて帰る釣船
箱崎夜雨	箱崎や明けなばいかに夜もすがら、雨の音そふ岸の松風
吾妻晴嵐	嵐ふく吾妻の峯に雲はれて、とふねもなみの花ぞきにける
洲口落雁	見渡せばかりがね落るすのくちの、岸によるなみ音もとだへて
榎戸夕照	榎戸や夕づく日なたさしむかひ、てりそふ影の深きうらうち
亀島暮雪	としつもる亀島山のしら雪は、むらがりやすむ鷺にぞありける
独園晩鐘	かならずと暁かけてちきりしも、独り園生のいりあひにかね

④ 正禅寺と鉾切に就いて

★正禅寺に就いて

概 要

所在地

横須賀市浦郷町4丁目5番地

(旧地名・番地) 横須賀市浦郷字鉾切2.925番地

宗派 臨済宗 建長寺派 自得寺末

開山 大永年間(1521~28) この頃、暘谷幹瞳、開基創建する。

なお、正禅寺の開創は慶長年間(1596~1615)の伝もある。

開基 達道建永禅師

本尊 聖観音菩薩像

寺宝 暘谷幹瞳禅師座像

七福神 毘沙門天

やぐら 本堂裏には、お墓を意味する本格的な「やぐら」が残っており、崖面に梵字が彫られている。

※ 万治2年(1659) 境内に板碑型三猿二鶏庚申塔が造立される。

※ 弘化3年(1846) 鎌倉仏師大石左門、木造大黒天像を造立する。

※ 明治3年(1870) 正禅寺塾が開かれる。但し、維新前から寺子屋教育はあった。

※ 明治6年(1873) 正禅寺塾を北浦学舎と改称、開校する。

※ 昭和27年(1952) 境内に「大東亜戦争戦没者慰霊塔」が建立される。

★鉾切に就いて

※ 夏島貝塚 詳細は「深浦の文化財」⑥ 夏島貝塚 を参照

※ 鉾切遺跡群跡 弥生時代後期から古墳時代に海浜部の集落が出来たころの古代人の生活の後である。

所在地は追浜運動公園端から自衛隊官舎、正禅寺裏の権現山周辺にかけてである。

昭和23年(1948) から昭和58年(1983) にかけて数回発掘調査が行われ、古墳時代の牛頭骨を使った最古の祭祀遺跡をほぼ完全な形で発掘、発表して大いに注目を集めた。 この祭祀跡の遺跡は、牛の頭を使う古代人の精神文化面を研究する上でも貴重な資料となったそうである。

この地は明治時代初頭に蒲谷新田開発がされ、大正時代に旧海軍航空基地建設で埋立てられて軍用地となった。 よって昭和20年(1945)終戦までは一般人は立ち入りが許されない場所となり、遺跡は終戦後に発見された。

※ 鉾切の地名の由来

由来は、源範頼伝説の他にも色々有る様だが、よく分からない。

源範頼伝説には、源頼朝に反逆の疑いをかけられた弟の蒲冠者範頼は伊豆の修善寺に押し込められるが、ひそかに修禅寺を逃れて榎戸の港に上陸し、漁師の兵衛衛に助けられ、蒲ヶ谷と呼ばれた谷戸（現在の神明社の移転先付近）にあった「やぐら」に隠れ住んだといわれる。 しかし、鎌倉の間者に知られるところになり、ついに襲われるが、平兵衛は鉾をふるってこれを倒すが、範頼はもはや逃られぬことを悟り、金沢室ノ木にある大寧寺に入り主従共々自害したと伝えられる。

※ 追浜の地名の由来・変遷

旧浦郷村の最北端に、烏帽子巖があった。 今は埋立てられた島であったが、ここから弓状に南下する海辺一帯の浜を、追浜と呼んだそうだ。

金沢瀬戸神社に残る寛文10年(1670) の「檀家諸事控」に「乙浜」と記述がある。天保12年(1841) の「新編相模國風土記」には、浦之郷村は江戸より行程13里、古くは浦ノ郷村とも記され、戸数267とあり、村東字追浜との記述がある。

明治16年(1883) 浦郷村戸長が県に提出した「字地書上」では、「おっぱま」のふりがながあったという。「乙浜」が「おいはま(追浜)」を経て「おっぱま」に変わった、との説もある。 伝説の蒲冠者範頼が兄・源頼朝の手勢に追われた浜との伝説が残る。 追浜航空隊の偉い人が「追われる浜」では縁起が悪いとして「追浜(おっぱま)」とした、ともいわれる。 由来は定かでないが、いずれにしても海軍航

空隊の発祥の地として名が全国に有名になったようだ。

※ 鉤切の蒲谷姓について

鉤切地区の住民の殆どが蒲谷の姓を名乗っていたのは、平兵衛が蒲ノ冠者の「蒲」を許され、これにやぐらの谷を加えたものだと伝えられる。

★ 正禅寺はその鉤切の中心にあり、蒲谷家の菩提寺であります。

★ 鉤切には昭和3年(1928)頃まで戸数360戸の民家があり、その内蒲谷姓が300戸近くにのぼっていた。

当時の鉤切は浦郷地区では一番大きな地域であった。

※ 鉤切の強制立退きについて

その後鉤切は年々海軍航空隊、海軍航空廠の拡張による、強制立退き命令により昭和5年(1930)頃から昭和19年(1944)にかけて300戸以上の民家が順次強制立退き命令により、他の地域に移転して行った。

そして終戦まで残ったのは、正禅寺とその周辺の民家数軒のみとなった。

※ 正禅寺の向かい側には神明社(寛文12年(1672)創建)という神社があった。

神明社は鉤切の鎮守として航海安全・大漁祈願の神様として信仰された。

神社も民家の移転と共に、現在地の正禅寺斜め裏の権現山に移された。

現在も「鉤切会」の皆様がお参りをしています。

戦後の鉤切

※ 昭和25年(1950) 鉤切の住民は新規発足した深浦町内会に入会した。

※ 昭和26年(1951) 横須賀市浦郷地区(現在の追浜行政センター管内)は町界地番整理がおこなわれ、鉤切は横須賀市浦郷町4丁目・5丁目・夏島町に分割変更された。

⑤ 官修墓地に就いて

所在地

横須賀市浦郷町3丁目60番地

市道船越鉤切線追浜トンネル深浦側入口の左側の階段を上って、左折し狭い階段を100mの登った右側の台地(追浜トンネルの上)

★ 横須賀市市政施行70周年記念の横須賀風物百選に選定されている。

経緯

※ 明治10年(1877) 2月 西南の役が九州にて開戦し、明治政府(内務省警視局)は東北、関東地方の廃藩置県で失業した多くの士族を警察官として採用。この四十八士も徴募に応じた勇士であって、陸軍で訓練を受けた後、「新選

旅団」所属の兵士として西郷隆盛らの反乱鎮圧のため転戦した。9月24日鹿児島県の城山に於いて西郷隆盛以下が戦死して西南の役は終結した。10月初頭、従軍の兵士は勲功を胸に意気揚々と海路東京に向け帰還の途についた。しかし途中船内に発生したコレラに感染し、悪化する一方で東京湾に入るも政府は伝染病を恐れて入京を禁じ、横須賀箱崎沖に停泊させ一切社会と隔離し、僅か1か月足らずのうちに故郷遠く、近親者にも会えないまま48柱の死没者を出したため、鉤切の海浜の黒崎（現アイクル付近）で茶毘に附し埋葬された。

政府は官修墓地として国費で監守者を常置し、修繕料を交付し、毎年春秋2回県庁・郡役所より関係者を派遣し、お盆には香華を供えて丁重に慰霊し管理した。深浦、鉤切の村民は線香を手向け花を供えて弔った。

※ 大正2年(1913) 官修墓地は海軍航空隊のため現在地に移葬された。

※ 昭和2年(1927) 墓地の大改修を加えた折、遺族を調べたが、1基「24番片岡茂太氏」の他には分からなかった。

50年経過したから分からないのか、もともと遺族のない方が、この横須賀の地に葬られたのか不明である。

※ 昭和8年(1933) 10月18日 西南の役戦病者慰霊の「義勇千秋義烈満古」碑を建立する。撰北村包直。相陽時事新聞社・横須賀老兵会建立。

※ 昭和36年(1961) 10月 墓地の管理を国から横須賀市に移管された。

政府埋葬以来、政府官修墓地として管理してきたが、終戦をもってこれを打切ったため「晨洋会」により祭祀および管理の復活を国会に請願する運動続けた結果、国より横須賀市に墓地の管理を委託する決定があった。

※ 昭和40年(1965) 漢詩「想国士」の碑が建立された。自然石 台石は御影石 深浦在住の社団法人ガールスカウト日本連盟顧問の吉原はる氏（春蘭と号す）により碑が建立された。

戦後吉原はる氏により結成されたガールスカウト第32団により 除草、清掃活動が始まる。昭和50年解団。その後深浦町内会が、除草、清掃活動を継続している。

※ 同年 7月 案内碑建立 市道船越鉤切線追浜トンネル深浦側入口左

黒御影石 台はコンクリート造円型

碑文 正面 西南役殉國者官修墳墓四十八基

左側面 官修墳墓監守人 蒲谷彦蔵

深浦婦人会開帳 渡戸スズ

晨洋会会長 大岩義一

※ 昭和50年(1975) 5月 横山和夫横須賀市長は墓地にみえ、厳かに慰霊祭が

行われた。

その折、千葉県銚子から大内恭平氏（元銚子市長）が見えられた。

聞くと、「10番大内昌氏」は恭平氏の曾祖父に当たるとのこと。

銚子にある墓には、「大内昌、32才、相州浦郷村に葬る」と記してある。

6年前より横須賀を訪ね、以後48勇士の遺族代表として毎年先祖の霊を慰めておられるとのこと。

以後毎年5月 横須賀市の主催で市関係者・北郷仏教界（独園寺住職代表幹事）・深浦町内会らが慰霊祭を行っていました。

- ※ 平成9年(1997) 横須賀市が予算削減のため市主催の慰霊祭を中止したので、市に代わって深浦町内会と追浜連合町内会の共催で墓前祭を行いました。以後毎年共催で墓前祭を行っている。

★ 尚、官修墓地の管理部局は「横須賀市健康部健康総務課」が担当

- ※ 平成19年(2007) 5月19日 墓前祭

銚子の大内恭平氏が平成9年市主催の慰霊祭中止後、久しぶりに深浦町内会からの墓前祭の案内を受けて墓前祭に参列しました。

以後毎年長男の一恭氏と参列しています。

- ※ 同年 48勇士を管理している、警視庁の担当係官らが墓前祭に初めて参列しました。

警視庁では、別に毎年7月お盆の時期に墓地の清掃と献花を行っていることを町内会が知り、5月に合同墓前祭参列を要請し、以後毎年担当部署の総務部企画課庶務係の4名（責任者警部）が参列し献花を供えています。

- ※ 同年11月12日 警視庁OBの方々と組織しています「警察政策学会・警察史研究部会」の戸高公德氏 白井良雄氏 齋藤眞康氏の3名が官修墓地にお見えになり、町内会で案内し、以後毎回墓前祭に参列しています。

- ※ 平成27年(2015) 5月10日 墓前祭

新たな遺族が判明し、墓前祭に参列しました。

榊原謙齋（48勇士 新潟県士族 新選旅団所属 明治10年10月29日没）の曾孫で長野県在住の榊原好恭氏兄弟4名で、138年ぶりに墓参のため深浦を訪ねる。

墓前祭に参列している遺族は、大内氏と榊原氏の2家族となりました。

- ※ 平成28年(2016) 5月14日 墓前祭

前年参列した榊原謙齋氏の遺族榊原好恭氏が榊原謙齋氏の戦地より家族に宛てた8通の書状を冊子にまとめたものを持参し、「戦争はむなしい行為と先祖の視点で伝えたかった」と子孫が平和への思いを報告した。

- ※ 令和2年(2020) 5月9日 墓前祭中止

新型コロナウイルス感染予防のため、墓前祭は中止となりました。

但し、深浦町内会のみで墓地の草刈りと清掃の後、線香を供えて丁重に慰霊した。

※ 令和4年(2022) 5月14日 コロナの中深浦町内会で墓前祭開催

遺族の大内一恭氏 警視庁から2名 追浜連合町内会より会長・副会長の2名 追浜行政センターから館長・副館長・担当職員ら4名
深浦町内会役員12名が参加しました。

※ 令和9年(2027) 官修墓地埋葬 150周年を迎える。

★戊辰戦争とは

明治政府は大政奉還、廃藩置県等矢継ぎ早に各種施策を発令したが、帯刀の禁止などに刺激され幕府残存を主張する守旧派が呼応して明治元年1月3日会津藩、桑名藩が鳥羽、伏見を守る薩摩、長州軍に攻撃を仕掛けた（鳥羽・伏見の戦い）内乱（戊辰戦争）で奥州越列搬同盟を組織して新政府に抵抗した。戦争は東北から北海道に広がったが、翌年5月函館五稜郭で政府軍に降伏し、戊辰戦争は終結した。

戦争の終結後、新政府は敗れた東北勢の処分を行い、藩主の幽閉、謹慎、削封、転封、重臣処分、贖罪金の賦課などを行った。

この戦争により諸藩財政は極度に窮乏し、新政府からの信用も失い、守旧派の旧藩士は諸施策に伴う登用もされず、働く術もなく生活に困窮するばかりだった。

★西南の役（西南戦争）とは

征韓論に敗れて鹿児島に帰った西郷隆盛は、ともに帰った桐野利秋、篠原国幹らと明治維新の当初、国家に勲功がある士族に対して家禄以外に与えられた賞典禄（ご褒美）を基金として賞典学校（「専門学校」や「幼年学校」などと言った）を創設した。

また、明治7年6月私学校党を創設し、篠原国幹が主宰する銃隊学校と、村田新八の主宰する砲隊学校を附属させ鹿児島県内各郷に136の分校を設置した。

鹿児島では県令以下の役人や区長、戸長の名称は、中央政府が定めた全国一般の名称を用いていたが、県令大山綱良以下の役人に県外人を一人も入れず区長、戸長、警察官にいたるまで、すべての私学校と、その分校の幹部をあて、県政は中央政府の法令とは無関係に、軍事組織、政府組織も私学校の指導で行われ、租税も中央に収めず、士族は相変わらず帯刀の上、銃器、弾薬を持ち西郷隆盛の命令一下直ちに戦闘態勢に移れるように組織し訓練されていた。つまりこれは事実上中央政府から孤立して、薩摩、大隅、日向の一部を領土とする1個の地方軍閥

政権で、西郷隆盛自身は何の役にもつかず最高権威、最高指導者として、悠然と君臨し、佐賀、熊本、秋月の乱にも自重して呼応しなかった。

しかし、明治10年になると西郷隆盛の力をもってしても、もはや一党を押さえることが出来なくなった。 しかも大久保利通独裁の中央政府は私学校党を巧みに徴発していき、金禄公債発行の際には大久保の主張で鹿児島県士族に限って禄高を公債額に換算するに当たっても、公債の利率で特別な優遇をしたが、木戸孝充らが全国公平な政策を行うべしとの原則的反対が強く、一般に鹿児島県のみを特別扱いにすることに対して、全国画一の行政を行う責任者である内務卿大久保利通を非難する声が高まった。 明治政府は、征韓派のエスカレートを封じるために政府軍の派遣をはじめ諸施策を次々に実行し、小警部中原尚雄ら10人余の鹿児島出身警察官を明治9年12月、帰省名目で鹿児島に送り、現地の情勢を探らせると共に親戚縁者等に同調しないように説得させた。

また、征韓派の軍備状況を危惧する陸軍省が鹿児島に保管していた兵器・弾薬などの一部を明治10年1月汽船で大阪に移送させたことなどが、私学校党を厳しく刺激してしまい、私学校党は明治10年1月29日夜 火薬局及び海軍省保管の造船所を襲い武器弾薬を奪取したほか、2月3日には中原警部ら21人の政府側警察官を拘束し、彼らが政府の密命を受けて私学校党の壊滅を諮り、西郷隆盛の暗殺を図ったことを自白させた。 しかし、この任務を政府側警察官に与えられていたか否かは確証がない。

西郷隆盛はわずかに九州一角の力をもって全国を敵として勝てるわけがないことを良く知っていたので武力で政府に反抗する気はなかった。 しかし、薩摩・大隅・日向などの士族は断固決起することを懇請していたが、西郷隆盛はこれらに安住の場を保証してやれば、いかようにでも部下を取り鎮める自身はあったものの、政府が明らかに徴発してくるため窮地に追い込まれ、明治10年に入ると西郷隆盛の力をもってしても、もはや一党を押さえることができなくなり、2月15日ついに篠原や桐野らに「自分の生命は諸君に預けるので存分にすることが良い」と言い、私学校党を基幹とする1万3千の薩摩士族を率いて熊本に向けて出発し途中宮崎の士族らも加わって最大時の兵力は3万に達し、にわか仕立ての政府軍は不利であった。

新政府は西郷隆盛挙兵の報を聞いて、征討の方針をとり、2月29日鹿児島賊徒征討の詔が出された。 有栖川宮熾仁親王が征討総督、陸軍中将山縣有明、海軍中将川村純義が征討参軍に任じられた。 征討軍は福岡を本官として南下した。 征討軍の総動員兵力は約4万6千名、内士族志願兵は約1万8千名であった。

熊本鎮台（熊本城）には東京よりの派遣の内務省警視局の巡查451名が、外の歩兵連隊の兵士等と合流、総勢3365名で守備についた。

※ 内務省警視局巡查は旧士族を対象に募集された。 特に東北勢は明治元年から

1年5か月の間、薩・長との戦いをした、いわゆる戊辰戦争の朝敵の汚名を被って非常に不遇な生活を余儀なくされ、何時まで経っても浮かばれなかったため、この急募にこぞって志願した。上京した応募者は一旦警視庁において幕藩時代の地位などを勘案して、警部心得や巡查心得の辞令を交付され、数週間の交番勤務をしたあと、千葉県習志野で短期軍事訓練の上、「新撰旅団」に編入させて九州に派遣した。

西郷軍の熊本鎮台の包囲戦は2月22日から4月14日迄に及んだ。3月14日新に陸軍中将黒田清隆が征討参軍に任じられ、別動隊を率いて八代に上陸し背後から熊本鎮台のある熊本城に進んだ。

田原坂の戦闘は（3月4日から20日）西郷軍をして心胆を寒からしめたのは、征討軍の士族巡查抜刀隊の奮闘であった。白兵戦で西郷軍の抜刀隊相手に、着剣したスナイドル銃を構えた数人が弧形陣で、敵が6、7mに近付いた時に一斉射撃してから銃剣で突き刺す集団戦法であった。

訓練、装備の充実した鎮台兵に田原坂の西郷軍は制圧されたのである。

熊本鎮台で籠城する事50数日、熊本城の包囲は解かれ、戦局は征討軍に有利であったが、西郷軍も勇敢に戦ったがついに敗れて、人吉、都城、延岡等各地に転戦して鹿児島に退去して城山に戻ったのは9月であった。

敗残の西郷軍は僅かに300余人、やがて9月24日征討軍の総攻撃を受けて西郷隆盛は負傷し、午前7時自刃して波乱に満ちた50年の生涯を閉じたのである。残った西郷軍も戦死して乱は平定された。征討軍総数6万余、内戦死6200人（警視局関係者は700余人）と云う。

特に綿貫吉直小警視の率いる警察隊は熊本城の鎮台兵の士気を鼓舞するなど多大な功績があったと伝えられている。後に警視副總監、元老議員になった。

出征した新撰旅団は10月20日をもって解団された。

⑥ 夏島貝塚に就いて

所在地 横須賀市夏島町2丁目 日産自動車追浜工場内

※ 明治13年(1880) 旧夏島は浦郷村字鉾切の附屬地で鉾切住民の共有地であったが、官有地として陸軍省が買収した。その後埋立てにより陸続きとなり海軍航空隊の飛行場となった。

※ 昭和25年(1950) 明治大学により、2回の発掘調査の結果、今から約9,500年前のものと判明し、当時としては世界最古の貝塚であったという。

※ 昭和34年(1959) 米国ミシガン大学での夏島貝塚から出土したカキの貝殻に対し放射性炭素測定法による年代測定で9,450年前に前後400年との

年代、木炭は9,240年前に前後500年の年代との測定値が得られた。

- ※ 昭和47年(1972) 国の文化財に指定され全国的になり、追浜駅から日産方面の道路も「夏島貝塚通り」の名となった。
- ※ 平成10年(1998) 6月 「夏島貝塚出土品(一括)」 国の重要文化財(考古資料)に指定される(明治大学他保管)
- ※ 夏島人は、波静かで浦々の入り江の多い冬暖かなこの地が、海の幸、山の幸に恵まれて、獣を捕えるのに弓矢を使い、魚を獲るのに独木舟を作り、銚、釣針等は夫々獲物に適した道具を考案し、改良した。
- ※ 貝塚から出土した遺物より、山野で猪、鹿、狸、兎、各種の鳥を捕獲し、自然の植物を採取し、岸辺でマテガイ、ハマグリ、アサリ、ハガイ、カキ等の貝を捕り、各種のり、各種の魚類を穫え、住居は貝塚周辺に竪穴式住居を造って生活し、縄文時代草創期の土器を作って食生活を充実して、自然採集中心の生活より漁撈を重要な生活手段として安定した食生活を図った。
よって、浦郷ははるか遠い昔からの歴史を持つ夏島貝塚の存在は大変重要である。
- ※ 夏島貝塚の対岸に野島貝塚(縄文時代早期7,000年前)や、南に榎戸貝塚(縄文時代後期3,500年前)がある。
- ※ やがて、地球の変動に依り、湿地化し、平地となって農耕技術が伝来すると、夏島人の生活は、自然採集の移行型から農耕へと移って、定着した生活に変化した。
- ※ 鉾切には鉾切貝塚遺跡が発見・調査されて弥生式土器や、奈良・平安期の土師、骨製品、牛を生贄にした祭祀遺跡、ド代瓦、ト骨、製塩跡等の遺物が多数出土している。
- ※ これらの古墳時代後期から奈良時代の頃には、御浦郡(追浜から長浦、逸見付近の地域)と呼ばれた「ムラ」であったと思われる。
- ※ 御浦郡の中心は多数の遺跡がある「鉾切」ではないかと思われ、この地で生活をした人々を葬ったのは鉾切やぐら群(20数穴)であり、横穴古墳があることはこの周辺に集落(ムラ)が存在した事を証明している。
- ※ 居住跡は未だ発見されない。
- ※ 独園寺には室町時代と思われる「やぐら群」(7~8穴)がある。
- ※ 付近には、天神和田山やぐら群(35穴)、観音寺下(1穴)、田川公園南崖(4穴)等の横穴があり、御浦郡の存在を示す唯一の貴重な証拠物証遺跡である。

⑦ 明治憲法起草遺跡記念碑 (深浦・鉾切にある記念碑)

- ※ 大正15年(1926) 11月 伊藤巳代治や金子堅太郎らが発起人となり建てた碑

である。

碑は夏島貝塚通りを直進し京急バス追浜車庫を左折し、日産自動車追浜工場の右側に隣接した夏島の手前にある。

碑は76個の御影石は明治憲法76条を示していて、飛行機の発着の妨げにならぬようにと低く配慮し建立されたという。

※ 昭和26年(1951) 2月 最初に建立したものが荒廃したため、復興作業をした。

※ 昭和50年(1975) 4月 日産自動車追浜工場建設のため、設置場所より200mの現在地に移設された。

※ 平成元年(1989) 3月 横須賀市の市民文化資産に指定される。

※ 明治20年(1887) 6月 伊藤博文は憲法の草案を練るため夏島に別荘を建てた。

伊藤博文がこの地を選んだのは、青年時代に見た金沢の風景が忘れ得なかったことと、自由民権派から逃れ、密かに草案起草を進める必要があったため、東京に近く、しかも人に知られていないこの地が相応しいと考えたからである。発起人である井上毅は野島館、伊藤巳代治と金子堅太郎は東屋旅館に宿泊し、小舟で毎日往復したという。作業は午前中であったが、雑談中でも話題が憲法に及ぶと、しばしば議論となったという。

東屋は安藤広重が宿泊した際「金沢八景」と題して描いた旅館であり、今の瀬戸橋際にあった。草案が完成すると、伊藤博文は別荘を大磯の滄浪閣に移し、明治21年(1888)8月 夏島は砲台建設が進められたのである。

★ 明治憲法について

明治22年(1889) 2月 公布 明治23年(1890) 施行された日本の憲法。

大日本帝国憲法と言い、略して「帝国憲法」、明治に発布されたことから俗称「明治憲法」とも。現行の憲法との対比で旧憲法とも呼ばれる。

⑧ 予科練誕生之地碑 (深浦・鉾切にある記念碑)

※ 昭和56年(1981) 6月予科練誕生之地 碑が建立され除幕式が挙行された。

その学び舎の後である貝塚緑地の丘に、生存者たちによって記念碑が建てられた。

その2年後の昭和58年(1983) 4月 そこに貝山緑地公園が開設された。緑地の一部は自然教材園となり、「杏の里」という杏の花が咲き、実がなる公園となっている。

この辺は、戦後工場地帯と化したのが、終戦までは海軍追浜航空隊が置かれていた地である。 明治末から追浜海岸が埋立てられ、沖合の夏島を

陸続きにし、広大な飛行場が造られた。

★ 予科練習部について

※ 大正5年(1916) 4月 には海軍航空隊が生まれ、昭和に入ると「月月火水木金金」という言葉を生むほど、飛行隊員は日夜、猛訓練が展開された。

※ ライト兄弟の人類初の飛行から9年後の大正元年(1912) 11月わが国初の水上飛行に成功したのが、実はこの地である。

※ 昭和5年(1930) 6月 日本で初めての予科練習部が併設され、全国の志願者から79名の少年たちが厳選され、若い血潮の「予科練」と呼ぶ飛行練習生が誕生し、茨城県霞ヶ浦の湖畔に移るまでの8年9ヶ月間、その教育が行われたのである。

※ 昭和14年(1939) 3月 予科練を横須賀航空隊から霞ヶ浦航空隊（茨城県阿見町に移す。

★ 当時予科練習生だった深浦在住「佐藤重雄氏(元深浦柏樹会々長)」の話。

「出身は秋田で、昭和9年に5期生の練習生として応募しました。集まったのは全国から7,589人で入ったのは200人、(37.9倍) あの頃は全国の中学生在が3年生になると、お前は予科練を受けろ、お前は陸軍戦車学校だって、と先生がよく言ったもんですよ。そして、卒業は昭和11年3月か4月だった。3月に2.26事件がおきて雪の降る中完全武装して半日位待機しましたよ。卒業時の位は二等航空兵でした。」とのことであつた。

⑨ 昭和天皇行幸之碑 (深浦・鉾切にある記念碑)

※ 昭和13年(1938) 11月に造立された。

「旧海軍航空技術廠本庁舎」(現シンジーテック株式会社工場) 庭内跡に、昭和天皇が同年8月、海軍航空技術廠を視察行幸された記念碑「昭和天皇行幸之碑」が立つ。

※「昭和天皇行幸之碑」は横須賀市内唯一のものである。

★ 海軍航空技術廠とは。

※ 昭和7年(1932) 3月 深浦湾に面した浦郷の陸地一帯に日本の航空技術の総合研究開発機関として海軍航空廠(後、海軍航空技術廠)が設置された。

ここに優秀な人材が集まり、航空機に関する先端技術の研究が行われた。

周辺地には貝山を挟んで、海軍横須賀航空隊、陸上飛行場や予科練生の

校舎が出来ていた。海軍航空廠の技術者が航空機の開発を行い、ベテランパイロット集団も飛行訓練を繰り返した追浜は、航空基地の最適地とされたのである。よって「追浜」という地名が全国に知れ渡ったのである。終戦時には職員1700人を含む37,000人が働いていた。ここから誕生した飛行機は「ゼロ戦」、「高性能艦上爆撃機 彗星」、「双発陸上爆撃機 銀河」、ジェット機の「立花」、ロケット機では「秋月」、B29迎撃用ロケット「噴流」、特攻機「桜花」などがある。

ここでの技術は終戦後、産業界で多方面に渡り影響を与え、「ゼロ戦」の改良をした松平精技師、「銀河」を設計した三木忠直技師は共に鉄道技術研究所（現・鉄道総合技術研究所）の技術者となり、航空技術をいかして初代東海道新幹線車両などの開発・設計をした。

井深大氏、森田昭夫氏は金沢支廠で出会い、後にソニーを創設している。

※ 昭和20年(1945) 8月 終戦とともに米国進駐軍に海軍航空技術廠・海軍航空隊飛行場等の追浜地域の軍需施設全域が接收される。

※ 昭和24年(1949) 10月 米軍より海軍技術工廠敷地は日本政府に返還される。

その後、平和産業都市への転換が図られ、多くの企業が進出した。

※ 昭和37年(1962) 6月 北辰工業株式会社が（現シンジーテック ㈱）設立され「旧海軍航空技術廠本庁舎」の建物等で業務を開始した。

※ 平成16年(2004) 12月 老朽化のため、旧海軍航空技術廠本庁舎は解体撤去され、その跡地に「海軍航空技術廠本庁舎跡」の案内板が碑と共にある。

★ 今も深浦に残されている海軍航空技術廠関連の施設を紹介します。

追浜トンネルに接していた水上機試験水槽（240㍓）を100㍓延伸させるため、道路をまたいだ橋状構造物は健在である。

航空技術廠深浦門入口には、現在東邦化学の施設で旧 風洞準備室らしい建物が残っている。また同じく東邦化学が使用している施設には試験水槽の関連施設らしき建物がある。ツタの葉で覆われ、年代を感じさせている。現日本和紡は発動機部の旧 第4研究所を使用している。